エミエットマンとサイクル性

— ゾラの『生きる歓び』における海 —

橋　本　政　子

はじめに

『ルーゴン＝マッカール』叢書第12巻の『生きる歓び』は1884年に刊行されたが，最初の構想から3年間の中断の後，筋書きや舞台背景の変更が加えられ完成した。心理的，哲学的作品にするという意図は1880年の第一準備草稿からあった。しかしゾラの現実の生活において，母親の死，文学の師であったフロベールの死，友人デュランティー，ツルゲーネフやマネの死に遭遇し，心気症（hypochondria）やペシミスムの苦しみで中断されていたのである。この作品を再考し始めたゾラにとって，1883年は「危機的状況[1]」の後の回復期であり，書くことにより「治癒[2]」したともいえる。

この作品の特徴は，資料を駆使するという従来の自然主義的手法ではなく，またゾラの同時代の第二帝政という枠組みに限定しないという作品であること

---

[1] Emile Zola, *La Joie de vivre*, préface de Colette Becker, *Les Rougon—Macquart*, ≪ Bouquins ≫ , Robert Laffont, 2002, volume Ⅲ , p.1024.　ゾラを中心にゾラのメダンの別荘に集まる小説家たちによる『メダン夜話』の出版はある意味公認されていたが，『ヴォルテール』誌編集者が自然主義グループの機関誌としては認めず，グループとしての活動が暗礁に乗り上げる。ゾラの取り成しの努力にも拘わらず，メダンの小説家たちは個別での文学活動を余儀なくされ，それがメダンの小説家たちの人間関係にも悪影響を及ぼし，さらに度重なる身近な人の死と遭遇したことでゾラの心気症は悪化していたことをコレット・ベッケールは述べている。

[2] *Ibid*., p.1025.「ゾラは，彼にとって仕事が本当の治療であったのだが—それに関しては多くの私信の中に見ることができる—1880年の終わりからそのまま放置していた計画に再び着手した」とコレット・ベッケールは書いている。

だ。ゾラは逆に，もっと親密で個人的な作品，自分自身の歴史や気質に深く根ざしたものをと考えていた。つまりゾラ自身のこと，家族，自分自身の個人的思い出など，自分そのものを作品に埋め込みたかった。

筋書きの変更は，伝染病，殺人，不倫などメロドラマ的要素が取り除かれたことである。そして舞台設定は，パリ郊外から海岸沿いの漁村へと変更された。このノルマンディーにあるボンヌヴィルという小さな村はこの作品にとって重要な舞台背景であり，第2準備草稿から生成された登場人物ラザールと，第1準備草稿から既に構想されていたポリーヌと共に，作品の主要な軸を構成している。

舞台背景としての「海」は，『ルーゴン＝マッカール叢書』の構想プランが10巻から20巻に広がった時点[3]では，『生きる歓び』は苦悩についての小説であったが，その中では「海」については触れられていない。近代化の始まる社会において，人の移動は容易になりつつあったが，ゾラは異国趣味を題材にはしていないし，旅行もあまり好んでいない。1870年当時流行りつつあった湯治としての海水浴を妻のために行った以外，海との繋がりはなく，中学までいた故郷といえる南仏プロヴァンスの海景のみがゾラにとっての海であった。1875年に初めてノルマンディーの浜辺に滞在し，その滞在で受けた海の印象を，いつか小説に使いたいとノートにメモを残している。また翌年のブルターニュ地方での二か月の滞在では，荒々しい海景に深い印象を受け，それが『生きる歓び』の舞台背景であるノルマンディーの海の描写に多く影響を与えることになる。

ゾラが『生きる歓び』執筆によって，精神的病を「治癒」できたことは「海」と関係があるのではないか。この問題に答えるために本論の第1章では，ゾラがそれまでに書いた『ルーゴン＝マッカール叢書』の他の作品において，『生きる歓び』以前の作品では「海」のイメージがどのように隠喩されていたかを論

[3] Alain Pagès, *Guide Emile Zola*, ellipses, 2002, pp 224-225. 1868年の最初の構想では10巻であったが，1880年には20巻に拡がった構想をジャーナリスト Fernand Xau に知らせている。

じ，第２章では三年の中断後，書かれた『生きる歓び』の背景となるノルマンディー地方のサントーバンの「海」の表象が第１章の隠喩で用いられた「海」とどう違うのか，この問題について考えるために，まず，ゾラの意図した抑制された「海」の表象とはどのようなものであるのか，そしてその中で強調されている，海のエミエットマン émiettement のイメージと，一日ごと，一年ごとに変わる，海のサイクル性のイメージについて述べる。そして第３章では第２章で述べた海のエミエットマン émiettement〔粉砕〕のイメージと，海のサイクル性のイメージという二つの要素が，死の恐怖に怯えるラザールと，また紆余曲折の中で苦しみを乗りこえるポリーヌの生き方とどう照応するのか論じたい。このゾラの自伝的[4]作品『生きる歓び』の「海」に持たせたエミエットマンと，サイクル性の二つのコントラストを通じて，ゾラはラザールとポリーヌにどう「死と生」を表現させたかったのか，またそのことがゾラ自身の「治癒」とどうつながったのかを探求していきたい。

１．『生きる歓び』以前の作品における海の表象

三年の執筆中断の後，新たにゾラが執筆を再開した『生きる歓び』における変更点の一つは小説の舞台設定が「海」に変わったことである。しかしゾラにとって何故舞台背景を「海」にする必要があったのか，また『生きる歓び』の「海」にどのような特別な意味を込めているのかを探るために，『生きる歓び』以前に書かれた作品の中で都市空間を表象する際，ゾラが海の隠喩を多用していることに注目したい。ゾラは『生きる歓び』で海をどのように捉え直したのかを知るために，それまでに書かれた『ルーゴン＝マッカール叢書』の他の作品の中に用いられた「海」の隠喩を見てみたい[5]。

---

[4] Emile Zola, *La Joie de vivre*, préface de Colette Becker, *Les Rougon—Macquart*, ≪ Bouquins ≫ , Robert Laffont, 2002, volume Ⅲ , p.1027.

[5] この点に関しては次の論文を参考にさせていただいた。寺嶋美雪，「豊穣と永遠」，『仏語仏文研究』，東京大学仏語仏文学研究会，第 41 号 , pp. 17-40, 2010.

１ － １．『パリの胃袋』

『ルーゴン＝マッカール叢書』第３巻『パリの胃袋』における海の隠喩は，パリの中央市場が夜明けとともに動き出す近代社会のダイナミックな活動の描写に使われている。夜明けの朝日の光線に照らされた中央市場での野菜の群れが，海の風景となっている。

> しかしクロードは熱狂して，ベンチの上に立ち上がっていた。そして力づくでフロランに，野菜のうえに上る朝の光を眺めさせた。それはまさに海であった。海はサン＝テュスターシュ広場からレ・アル通りにいたるまで，ふたつの建物のかたまりのあいだに広がっていた。そして両端のふたつの十字路で波はさらに大きくなり，野菜の洪水が舗石を覆いつくし沈めていた。（中略）人々があいかわらず荷下ろしを続け，野菜がまるで舗石の一山が荷車から地面に落とされるように，多くの波にまたひとつの波を付け加えていたが，今ではその波は反対側の舗道にまで打ち寄せていた[6]。

高いところから見渡す一視点をとおしての市場の風景。道路を埋め尽くす多量の野菜，朝日を浴びて道路を埋め尽くしながら広がっていく野菜の流れ，荷馬車から荷下ろしされ，次々に押し寄せる野菜の「波」が「洪水」のようになっていく様子など，中央市場の光景を果てしない「海」ととらえ，パノラマ的に描いている。

またこの海に喩えられた野菜の波の光景にゾラは色彩を重ねていく。野菜の波は朝日の光線を受けながら，野菜の色，種類，形態を増やしながら氾濫していく。

---

[6] Emile Zola, *Le Ventre de Paris*, *OEuvres Complètes*, Nouveau Monde, t.5, 2005, pp.264-266.　以下，日本語訳は執筆者による。拙訳については，次の既訳を参照させていただいた。エミール・ゾラ『生きる歓び』，≪ルーゴン＝マッカール叢書≫第 12 巻，小田光雄訳，論創社，2006. また，下線は引用者による。

しかしさらに高い声で歌っている鋭い音は，やはりニンジンの強烈な赤と，カブの清純な白で，市場に沿ってばらまかれた大量のそのふたつの野菜が，二色混合で市場全体を輝かせているのだった。レ・アル通りの交差点では，キャベツが山になって，連なっていた。青ざめた金属の砲弾のように固く身の詰まった巨大な白キャベツ，大きな葉っぱがブロンズの水盤に似たチリメンキャベツ，そして夜明けの光を受けて，深紅と暗い緋色の痣を持つ見事なワイン色の花と化した赤キャベツ。反対側のサン＝テュスターシュ広場の交差点では，オレンジ色のセイヨウカボチャが腹を膨らませ二列になって広がり，ランビュトー通りの入り口をバリケードのように塞いでいた。そして籠に入ったタマネギの金褐色の光沢，トマトの山の血のような赤，ひとまとまりに積んだキュウリの黄色っぽいぼんやりした色，房状のナスの暗い紫などが，あちこちに点々と輝いている[7]。

野菜で溢れた市場は，豊饒さや色彩の豊かさに満ちた海のイメージで，描写は，視覚や聴覚，また味覚などの感覚に次々に訴えて，色彩やリズムで高揚をもたらすゾラの独特な表現手法である「シンフォニー」が用いられながら，一枚の印象派の絵画のような美しいピトレスクな表象となっている。

１ － ２．『ボヌール・デ・ダム百貨店』

『ルーゴン＝マッカール叢書』の第 11 巻である。近代商業の幕開けであるムーレの経営する百貨店の描写でもまた「海」の隠喩が使われている。変容した商業の形であるデパートという巨大な建物には物の集積と人の集中がある。デパートを舞台にしたこの小説では，売り出しの日，道行く人々が吸い寄せられるように玄関から中に入って来て，ホールは一杯となり，人の波となって，海流のようにうねり始める。

客で賑わう店内の風景は上の一視点からの広大な海景として表象される。ホー

[7] *Ibid*., p.265.

ルを埋め尽くす，密着する客の頭が，渦を巻く流れとなって「大海原」を形成する。

> 彼女は今，さきほど横切ってきたばかりの一階の売り場とそこに広がる沢山の婦人客の群れを，眼下に見下ろしていた。それはまた新しい光景で，上から見た頭ばかりの大海原であり，胴着は隠れて見えず，蟻塚の中のように騒がしくいた[8]。

デパートの中は商品が溢れ，物が氾濫してくる。「上げ潮」の海面が上がってくるように，集積されていく商品の波に埋もれ，溺れそうになる店員たちの様子が海の隠喩で描かれる。

> そして床の上には，千六百万フランの商品が積み重なり，ついにはテーブルやカウンターをも沈めていく，上げ潮の海のようだった。肩まで商品の海に浸かった店員たちは，商品を元の場所に戻し始めていた[9]。

近代商業のダイナミズムを自然の「海」の壮大さに照応させながら，海をアナロジーとして使用している。

> さまざまな呼び声が飛び交い，通りの名前が呼ばれたり，注意事項が発せられたり，まさに錨を上げようとしている商船の騒音と喧噪さながらだ。ムーレはしばらくの間，不動のままで立ち止まり，さきほど地階の反対側で，店が呑み込んだのをみたばかりの商品が，このように吐き出されるのを見ていた。巨大な潮流は，そこまでたどり着き，金庫の奥に金貨を置いた後，ここから表の通りへと出ていくのだ[10]。

---

[8] Zola, *Au Bonheur des dames, OEuvres Complètes*, Nouveau Monde. t.11, 2005, p.448.
[9] *Ibid*., p.478.
[10] *Ibid*., p.501.

大きな建造物であるデパートは巨大な「商船」であり，引き潮の波のように大量の商品を飲み込んだあと，満ち潮の波のように市場に商品を吐き出していく。その流れは「広大な潮流」であり，ダイナミックな経済の循環でもある。

１ － ３．『獲物の分け前』

『ルーゴン＝マッカール叢書』の第２巻にあたる，パリの都市改造に絡み，土地取引で財を成そうとするサッカールを主人公とする『獲物の分け前』にも，「海」の隠喩が見られる。ブーローニュの森やモンソー公園，モンマルトルの丘から見下ろすパリの描写を見てみよう。

ブルジョア階級の人々を乗せた多くの馬車が，列をなしてゆったり森の中を散策する風景である。

> ブーローニュの森は広大な芝地，巨大な緑のカーペットとなって広がり，あちこちに大木の木立が植えられていた。一面の緑は軽やかに波打ってミュエット門まで続いていて，はるか遠くにその低い門の鉄格子が，地面すれすれに張られた，一枚の黒いレースのように見えていた。傾斜地のところは，緑の波が沈んでいく個所で，草が群青色であった[11]。

雑木林を抜けると，芝地の緑の空間が広がり，その「一面の緑は軽やかに波打って」おり，穏やかな凪の海のイメージとして描かれ，傾斜地で下っていくその緑の波は，「海の群青色」であった。継母にあたるルネと息子のマックスの禁断の恋愛関係を予告するように，二人を乗せた馬車から見える森の広場は，二人の心情を反影するアンニュイで不安定な「海」である。地平線上に広がって揺れ動く緑の景色を，「群青色」の海としてパノラマ的に捉えている。

またルネとサッカールの住まいの館から見える，夜のモンソー公園の風景もまた静かな，しかし宿命的波乱を予告する「海」の隠喩であり，渇いた木々の

[11] Zola, *La Curée, OEuvres Complètes*, Nouveau Monde, t.5, 2005, p.27.

葉の擦れる音が聴覚にも訴えながら,「海岸に打ち寄せる波」を想起させ，幻想的にうごめく静かな「海」を想像させる。

> 下の公園には暗闇の海が広がっていた。突風に揺さぶられる高い葉叢は真っ黒な塊となり，上げ潮と引き潮の波のように大きく揺れ，渇いた木々の葉音が小石の海岸に打ち寄せる波を想起させる[12]。

また主人公は巨大なパリの風景をパノラマ的に高い丘から俯瞰する。パリの土地買収でのし上がっていくサッカールにとってパリは戦闘の場所でもある。群衆の苦しみが渦巻くそのパリを「海」で表現している。

> その日彼らは丘の頂上の，パリに向かって窓の空いているレストランで夕食をとった。パリはまるで青っぽい屋根をのせた建物の大海原のようであり，広大な地平を一杯にしながら迫ってくる大波にも似ていた。（中略）そして彼の視線はほれぼれとその生き生きとしてひしめいている海原，群衆の重々しい声が出てくるその海原に下っていくのだった[13]。

ここでは，都市改造により生まれ変わりつつあるパリという都市の壮大さを「大海原」と表現し，建ち並ぶ建物群の青い屋根を「大波」として暗喩している。ダイナミックな景観と,「群衆の重々しい声」が聞こえる「海原」を，聴覚にも訴えながら「海原」をイメージさせている。

2．『生きる歓び』における海

このように，第１章で見てきた『生きる歓び』執筆以前の作品における「海」の隠喩には，豊饒で壮大なイメージが多く，物や色彩に満ちあふれ，多様性に

[12] *Ibid*., p.35.
[13] *Ibid*., p.75.

富むものであることが確認された。ところが『生きる歓び』で描かれる海は全く異なり，豊饒さはなく，物の豊かさも感じられず，色彩も豊かではなく，モノトーンで多様性のないものとして表象されている。

この作品に関し，ゾラはこれまでとは描写の手法を変えている。ゾラの準備草稿の中にはプランがあり，そこには「いつものシンフォニーは使わない」と書かれ，また「最小限度の指示に抑制された描写。きっぱりとして，かつ正確で力強い文体を使い，一切のロマンチックな飾りもつけない[14]。」と記述されている。ここで云う「シンフォニー」とは，ゾラ独特の表現であり，音楽芸術の表現方法をエクリチュールに応用したもので，多種多様な音色を考慮しながら作り出すシンフォニーの高揚感を，エクリチュールで表す手法と考えられる。

したがって『生きる歓び』における「海」の表象で支配的なのは色彩や多様性ではない。それはむしろ海の持つ力であると考えられる。ゾラにとって初めての海の印象が強烈であった事は，多くの私信で知ることができるが，ノルマンディーの壮大な海の風景にある断崖絶壁や，刻々変わる海の様相に想像力の源泉を見たのではないかと思われる。友人アレキシスへの書簡にはこう書かれている。

> これはサントーバンからの便りである。昨日はシャルポンチエ夫人を伴い，馬車を賃借してアロマンシュまで日帰り旅行をした。アロマンシュでは，見事な断崖があり，僕たちの故郷の，むき出しで平坦な海岸と比べるとここはずっと詩情に満ちた土地に思える[15]。

したがって，都市空間の表象で使われた隠喩の海とは異なり，『生きる歓び』の舞台となるノルマンディーの荒々しく，可変性のある海で，最も重視したい

---

[14] NAF.10311, fo 366/1, cf. Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, t.4, Champion, 2009, p.1202.

[15] Lettre à Paul Alexis, Saint-Aubin, 17 septembre 1875, *OEuvres Complètes*, Nouveau Monde, 2005, t.7, p.722.

二つの作用が，エミエットマン［粉砕］とサイクル性であると考えられる。この小説にはエミエットマン［粉砕］の概念が重要であり，それに対しもう一つの作用である「サイクル性」という作用の概念が対峙されている。したがって第２章では，抑制された「海」の表象がどのようなものであるか，そしてこの小説に現れる海の特性である二つの作用が，どう描かれているのかを見てみよう。

２ － １．抑制された海の表象

『ルーゴン＝マッカール叢書』の全20巻の小説は，近代社会の中で，「環境」と「遺伝」を基に，時代枠を第二帝政期に設定し，人間と自然を描いているが，ゾラにとって，『生きる歓び』という作品は，主人公ポリーヌが第３巻『パリの胃袋』のリザ・クニュの娘であるということ以外，時代をあまり第二帝政期に限定しておらず，ゾラが自分自身を投影するという意味において特殊な作品である。ありのままの自分を反映させるために，上記の準備草稿のプランに示したように，「シンフォニーを使わず，描写は抑える」表象を指向しているが，物語の舞台となるノルマンディーのボンヌヴィル村は，色彩的で，ダイナミックな描写ではなく，モノトーンで，平穏に抑えられ，象徴的に描かれている。

> その街道は両側にある断崖の間を下っていて，岩に斧の一撃をくれたような裂け目に見え，何メートルかの土が堆積するままになり，そこにボンヌヴィルの二十五軒から三十軒のあばら家が建っていた。上げ潮になるたびに，狭い砂利床の上の家々を斜面に押し付けつぶさんばかりに見えた。左手には小さな浅瀬の港があり，その帯状の砂浜で男たちが規則正しい掛け声を上げ，十艇ほどの小舟を引き上げていた。住民は200人にもとどかず，軟体動物の愚鈍な頑固さで岩にしがみつき，ひどく苦労し，漁で暮らしていた。そしていつも冬の波で突き壊されているみすぼらしいそれらの屋根の上には傾斜のゆるやかな断崖があり，その上に街道の峡谷をあいだにして，右手に教会，左手にシャントーの家が見られるだけだった。それがボ

ンヌヴィルのすべてだった[16]。

「断崖」,「裂け目」, など象徴的な情景が並ぶ漁村の風景である。「断崖」の下に並んだ漁民の家々は「上げ潮」の海が「家々をつぶさんばかり」であり,「岩にしがみつき」なんとか暮らす漁師たちを軟体動物に喩え, 受動的生活姿勢が描かれる。海は大波で, 陸を叩き, 少しずつ齧りながら, 食い, 粉砕していく。バシュラールが『水と夢』の中で言っているような,「大地」と「水」の二元素が想像力を掻き立て, 大地が水に侵略される海の脅威や, ミシュレの言う「窒息を招く水」が象徴する死が提示される。また「岩に斧の一撃をくれたような裂け目」は, ボンヌヴィル村が「死」に取りつかれているイメージを彷彿させ, 暗い宿命を表出している。

> 遠くでは波の怒号が大きくなり巨大な波頭が白波を立て, 死の黄昏が, 家に閉じこもってしまったことで人気がなくなったボンヌヴィルの断崖の足元に, 重くのしかかっていた。一方で砂利浜の高いところに放置された小舟が, 打ち上げられた大きな魚の死骸のように横たわっていた[17]。

また人気のない, 打ち捨てられた浜辺の情景は,「死の黄昏」,「魚の死骸」など, 死に結びつく語彙が続き, 暗く沈んだ, モノトーンな海景は, 明らかに抑制された表象に思われる。

2 ― 2. 海のエミエットマン［粉砕］

物質が時間の経過と共に崩れ, 壊れて細片になるという現象がエミエットマン［粉砕］であるが, ゾラはこの語彙を準備草稿の中で人間性のエミエットマン［粉砕］として使用している。

---

[16] Emile Zola, *La Joie de vivre*, Nouveau Monde, t.12, 2005, p.22.（以下 JV と略す）
[17] *JV,* p.27.

全てを毒し，ジャックの人生を台なしにしながら，実際にはおそらく実行はしないが，自殺にまで導くこの観念の荒廃を示さねばならない。もし芸術との戦いから身を引いたとすれば，すでにそれは「そのような事をして，何の役に立つというのか」という疑問の結果である。彼の全ての唐突な行動は，彼をむしばむこのような考えに起因するべきだ。つまり彼のゆっくりとしたエミエットマン［粉砕］である[18]。

海の場合，その脅威的破壊力で何もかも粉々にしていくエミエットマン［粉砕］の描写が小説の随所に差し込まれる。

しばらく沈黙に包まれた。四本の蝋燭が炎を高くして燃え，それこそ海の奴が断崖を叩く音が聞こえた。この時期は満潮で，その波が崩れ落ちるたびに家を震動させた。それは巨大な大砲の爆発音のような，規則的な深い発砲音で，たて続けの射撃音のミシミシいう音にも似た，岩の上を転がる小石が砕ける音に混じって轟いていた。そしてこの騒音のなかで，風が嘆くような咆哮を発し，雨が時を追うごとに激しくなり，鉛の雹で壁をたたきつけているようだった[19]。

漁民のあばら家を壊し，全滅させようとする大潮の時期の海の描写である。ここでは漁民の生活を押しつぶそうとする大波は，生き物となり，海は戦場と化したかのようだ。大波は，「大砲の爆音」や「射撃音」にも似た音をたてながら，雨は「鉛の雹」となって壁にぶつかりながら，戦争の攻撃さながらの激しさであり，聴覚にも訴えながら，海のエミエットマン［粉砕］の脅威を表現している。

ラザールは波に食われる漁民の村を海のエミエットマン［粉砕］から守るた

[18] NAF.10311, fo 189/46, cf. Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, t.4, Champion, 2009, p994.
[19] *JV*, p.35.

め，防波堤を作る。しかしそれは海藻事業で失敗した海への恨みを晴らすための海への挑戦であった。嵐の度にその防波堤は少しずつ波に壊されていくが，ある年の烈しい嵐で完全に破壊され，粉々に散って，消失する。

> 五月の強い嵐で，最後に残っていた三軒も断崖に吹き飛ばされ潰れてしまった。それでおしまいだった。大波は数世紀に及ぶ攻撃の後で，海の耐えざる侵略を受け，毎年この地方の一角を食いつぶし，この村を一掃してしまった。砂利浜の上にはもはや残骸の痕跡まで消してしまう，勝ち誇った波があるだけだった。（中略）海は破壊仕事を完成させるために，まず堤防や柵を持ち去らねばならなかった。（中略）彼らの心は怯えさせられながらも自負心であふれていた。海の奴はかなり激しくうめき，あんなものなど，一掃してしまうのだ！実際二十分もしないうちに，柵は引き裂かれ，堤防はつぶされて粉々になり，全てが消え失せた[20]。

近代社会で発展しつつあった工学を駆使し，波を止めようとする堤防の存在であったが，どう猛な海の破壊力により堤防は完全に無に帰した。海は「数世紀に及ぶ攻撃」を続けながら陸を侵略し，村を「食いつぶし」,「一掃」する。勝ち誇る波は，堤防の「破壊の仕事」を完成させるために「柵を引き裂き」「堤防をつぶし」,「粉々に」するである。海のエミエットマン［粉砕］は，しばしば嵐の荒れ狂う力に結びつき，暴力の観念や死につながる破壊のイメージである。

２ － ３．海のサイクル性

海のエミエットマン〔粉砕〕により表象された，荒れ狂う，獣のような海も一定の時間が経つと全く違う様相へと変化する。いきり立った海，敵対心を持った海は，潮が変わることにより，落ち着きを取り戻し，海のサイクル性により

[20] *JV*, p.223.

平穏がもたらされる。

> 暗闇が広がる混沌の底にはもはや上げ潮の波の蒼白さしか見えなかった。白い泡が常に拡がっていき，次々に波が押し寄せ，海藻の一帯に流れこみ，岩の多いところでは岩を覆いながら，うっとりさせるように優しくすべりこみ，波の岩に近づく様子は愛撫しているかのようだった[21]。

徐々に上げ潮となってくる様子であるが，波は「うっとりさせるように優しく」すべりこみ「愛撫しているかのよう」に，海の優しく，穏やかな状態が描写されている。

海は一日ごと，一年ごとに，規則性に従い，自然の律動を保ちながら，そのサイクル性を示す。ゾラの準備草稿の中には，潮について以下のような記述がみられる。

> 二つの上げ潮の間隔は平均して 12 時間 25 分 14 秒であり，したがって潮が上がるには平均約 6 時間 15 分かかる。（中略））太陽と月が赤道から近くなればそれだけ，潮は大きくなる。すなわち 3 月 20 日又は 21 日の春分と 9 月 22 日又は 23 日の秋分時である[22]。」

ゾラが潮の満ち引きである，海のサイクル性に関心を示していたことが窺われる。

> しかしながら，海は毎日二度，ボンヌヴィルの村を果てる事のない大波の揺れで叩いていた。（中略）海はいつも生命があふれ，十二月の陰惨な大気になると鉛色，五月の初めの太陽の下では絶えず変化する波紋を浮かべた

[21] *JV*, p.27.
[22] NAF.10311, fo 322 cf. Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, t.4, Champion, 2009, p.1140.

優美な緑色だった[23]。

「毎日二度」の潮によって規則的に変化を見せ，「大波の揺れ」でボンヌヴィル村を叩きながら，永続的に同じ運動を続けていく。また一年単位でも，大潮や小潮など，季節によりまた同じ規則性を見せる。冬の暗く冷たい鉛色の海も，春になるとまばゆい光を水面に反射させ緑色に変わるという，海のサイクルが続くのである。

時間や季節による潮や天候の変化は，海を様々に変転させるが，その運動は繰り返しの連続であり，そのサイクル性は永遠を告げている。

太陽が巨大な海に沈み始め，色あせた空から平穏が降り立ち，果てしない海や空が美しい落日のうっとりするような甘美さをたたえていた[24]。

荒れ狂う嵐の後には，「平穏が降り」立った静かな海へと変わる。海は可変性と不変性をもちながら，永遠に繰り返えされる，サイクルなのだ。

3．主人公のエミエットマン［崩壊］と再生力としてのサイクル性

これまで『生きる歓び』における海の表象を二つのイメージから見てきたが，つぎにこれらが登場人物にどのように反映しているかを第3章で見てみたい。特に第2準備草稿から出現した新しい主人公ラザールを描くには，物理的にも精神的にも，エミエットマン〔崩壊〕という概念が必要であったし，またそれとは対照的に，第1準備草稿から生成されていた，善を体現する主人公ポリーヌの造形には，サイクル性が示す「再生力」，つまり生き続ける力が必要であったと考える。

---

[23] *JV*, pp.47 - 48.
[24] *JV*, p. 235.

3 ― 1．ラザール

海の属性であるエミエットマン［粉砕］は陸を侵食し，大地を齧り，細片にして無に帰していく，破壊の現象であったが，人間も自然と同様，同じエミエットマン［崩壊］の現象があるとゾラは考えた。1883 年に書かれた第 2 準備草稿にはゾラはエミエットマン［粉砕・崩壊］について，次のように書いている。

> しかし特に，私が物の中にしばしば見てきたエミエットマン［粉砕・崩壊］を，人間の中に追求したい[25]。

ゾラは 1880 年の後，1883 年に再度，この小説の執筆を開始したが，この小説の第 2 準備草稿から現れるラザールの人物素描は次のようなものであった。

> 最初の時点では小さな悪であるものが，完全な破壊を招くまでになる一つの小さな悪の荒廃を層ごとに連続的に分析。近代世界の人間の一つの類型であること。そして死に取りつかれていて，恥として他人には隠している秘かな強迫観念によって荒廃していく人間。私はそれを保持することに大いにこだわる。そこが私の観念のはじまりであり，この恐怖は最初，子供の時点では希薄であるかもしれないが，ある影響の下に，大きくなっていくかもしれないその恐怖[26]。

「小さな悪」から始まるが，年を経るにつれて「完全な破壊」にまで至る「悪」。その「悪」が徐々に人間を荒廃させていき，人間をむしばみ，海の侵食と同じように，エミエットマン［崩壊］にいたらせる。ゾラはその人物をラザールに割当てている。

---

[25] NAF10.311, fos144/1, 145/2. cf. Colette Becker, *La Fabrique* des *Rougon-Macquart,* t.4, Champion, 2009, p.905.
[26] NAF.10311, fos178/35, 179/36. *Ibid*., p.984.

しかし，特に強調しなければならないのは精神的な性格である。私は彼の中にペシミスムによるエミエットマン［崩壊］を表現したい。そしてそれを世紀病の，つまり始まったばかりの我々の科学に冒された病人に私は彼をする[27]。

そのエミエットマン［崩壊］に関し,「死に取りつかれている人間」を三段階に分けて，それぞれ分析している。

第一段階として，死の恐怖を恥として隠している病が不眠を引き起こし，神への無意識の救済を求める行動にさえなるほど，ラザールの苦悩は深刻で，精神が破壊されていく。

ラザールは歳を重ねるにつれて，死が立ちふさがるのを見た。二十歳になるまでは夜寝る時に，かすかに冷たい息吹を感じるだけだったが，今になると，枕に頭を乗せるとすぐに必ず死んでしまうという思いが顔を凍らせるのだった。不眠になり，死を思わせる幻影が繰り広げられる宿命的必然性を前にして，諦念を得られずにいた。（中略）この自分が否定している神への呼びかけ，世界が崩壊する中で救いを求める人間の弱さの遺伝はまさに滑稽ではないだろうか？だが発作は毎晩訪れ，その理性にもかかわらず，疲労困憊させる悪しき情念に似ていた[28]。

海藻から成分を取り出して工業化するという，化学者エルブランの師事の下で，取り組んだ事業だったが，技術の進歩に工場は対処できず，ラザールの海への挑戦は失敗に終わる。海にまだ手つかずのままで，豊富にある海藻が，全て黄金に変わるという夢想を抱き近代社会の英知を駆使して工場を建て，海を征服するというラザールの夢は，熱狂的な希望だけに取りつかれたもので，そ

[27] NAF.10311, fo 235. *Ibid*., p.1040.
[28] *JV*, p.72.

の事業は金をまき散らしながら破産し，海との戦いに敗北するのである。その後恐ろしいほどの冬の荒々しさの中で家に閉じこもり，進歩を否定し，化学も最終的に役立たないという主張を繰り返し，生きようとする盲目的な馬鹿らしさを冷笑しながら，虚無感に陥り，精神的な崩壊は深刻になっていく。

第二段階はラザールの母親の死んだ後，永遠の別離の観念がラザールをさらに蝕み，エミエットマン［崩壊］の現象が，さらに強く表出される。

> したがって，ラザールの苦悶は大きくなるばかりだった。何年も前からベッドに入ると，死の観念が頭をよぎり，肉体を凍てつかせていたが，今や二度と目覚めないのではないかという恐れに苛まれ，あえて眠ろうとしなかった。彼は睡眠を嫌悪し，目覚めている状態から虚無の眩暈に落ち込むとき，自分の存在が消えてしまいそうに感じることを憎悪した。それから突然の目覚めがさらに彼を揺さぶり，暗黒の中から彼を引きずり出した。あたかも巨大な手で髪をつかまれ，生の方に投げ戻されたかのようで，出て来たばかりのその未知の世界は口ごもるほどの恐怖を伴っていた。ああ，神よ！ああ，神よ！死は必然だったのだ！これまで彼の両手は一度もそのように絶望的な調子で合わされたことがなかった。毎晩彼の苦悩はこのようなものだったので，ベッドに入らないほうを望んだ[29]。

「甘やかされた子供[30]」として，自己中心的に生きてきたラザールにとって，進行の速い心臓病による母親の死は，隠し通していた「悪」を増大させ，死の恐怖という病を一層深刻にさせる。「私」という「自分の存在」が失われたその世界は「暗黒」で恐怖でしかない。母親の心臓病という悪しき遺伝を疑いながら恐怖に追い立てられ，粉砕されていく。また前章で引用したが，ラザールの建設した堤防が決定的な崩壊に至るのも母親の埋葬が終わり，帰路に着いた嵐の時であった。ラザールにとっては，自分の堤防が波をくい止め，村を守り，

[29] *JV,* p.146.
[30] Zola, *La Joie de Vivre*, Gallimard,1985, préface de Jean Borie, p.19.

人間が海に勝利する意図で取り組んだ事業であったが，漁民たちは壊れていく堤防を見ながら，むしろ自然の方に味方し，ラザールの敗北を喜び，嘲笑する。漁民の振る舞いにラザールの自負心は傷つき，虚無の世界への落ち込みは加速する。

第三段階は老いと共に強調されていく死の恐怖である。四十代「中年危機[31]」と云われる四十代の肉体の衰えに，死への接近を感じ，虚無感に囚われ，行動の中に致命的に死に冒される自分を見るのである。

> この頃ラザールは事業にうんざりしてしまった。彼の怠惰が再び始まり，無為に毎日を送り，その言い訳は金融家たちへの軽蔑だった。だが真相はこの死に対する日常的気がかりであり，日毎に生きる力と熱意を失っていたからだ。彼はまたしてもかつての「何の役に立つのか？」という疑いに落ち込んでいた。（中略）彼の生存はゆっくりとした日々の死でしかなく，かつてのように次第にゆるやかになり消えてしまう死の時計の動きに耳を寄せた[32]。

近代社会の新しい事業を興すことをあきらめて，ルイズと結婚後，今度は金融という分野で働くことになる。しかし現実の様々な困難に遭遇すると，仕事もうまく回らなくなり「怠惰」で「無為」になり，日々の行いにさえ「日毎に生きる力と熱意を失って」いき「ゆっくりとした日々の死」という倦怠に襲われる。また身体的にも，「ゆるやかになり消えてしまう死の時計」である心臓に衰えを感じながら，彼自身の損耗，肉体の絶え間ない破壊を感じるのである。自分の中でいつも狂いかけている歯車の軋る音が聞こえ，老いの坂道にとどまれず，滑り落ちていくようで，その果てにある大きな暗い墓穴を思うと，冷たい汗にまみれ，恐怖で髪が逆立つのである。ラザールは不安と強迫観念に支配

---

[31] David Baguley, «*De la mer ténébreuse à l'eau maternelle : le décor symbolique de La Joie de vivre*»,*Travaux de Linguistique et de Littérature*, 1974, n 2, p.81.
[32] *JV,* p.185.

され，死に向かって崩れていく。ゾラは準備草稿の中で次のように記述している。

> 死の恐怖が，私の作品に性格全てを与えるものである。それが作品の軸にならなければならない。それなしではこの本のオリジナリティーはない[33]。

このように死の恐怖が心身ともにラザールをエミエットマン［崩壊］していき，その苦しみはこの小説の重要な軸の一つを形成する。

> 月日が毎日少しずつ彼の生命を運び去るにつれて，この死の観念が彼の存在の崩壊を急がせ，男としての最後の精力まで滅ぼしてしまった。自分でも言っていたように彼は終わったのだ。それからは不要の人間になり，動いても何にもならないと考え，愚かな倦怠の中で次第に空虚な存在になっていった[34]。

ラザールは「始まったばかりの科学に冒される病人」であり近代社会に生きる人間の生き方の一典型でもある。ゾラの「自伝的小説[35]」とコレット・ベッケールが述べているように，実際，ゾラは自分自身の計画や夢をラザールに托して，文学，音楽，医学，化学，工学などに情熱的に色々な試みを行わせるがすべてに失敗する。乱雑で，悲惨で不条理な世界のヴィジョンを映し出しながら，生きる意志がエミエットマン［崩壊］していくのである。

３ － ２．ポリーヌの再生力としてのサイクル性

近代社会の新しい分野に次々と挑み，その度に失敗し，虚無感に陥り，粉砕

---

[33] NAF.10311, fos188/45, cf. Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, t.4, Champion, 2009, p.994

[34] *JV*, p.234.

[35] Emile Zola, *La Joie de vivre*, préface de Colette Becker, *Les Rougon-Macquart*, ≪ Bouquins ≫ , Robert Laffont, 2002, volume Ⅲ , p.1027.

されていく人物として描かれるラザールを見てきたが，失敗して落ち込むたびにラザールを勇気づけ，再生させるのはポリーヌである。ゾラはラザールに「生きる苦しみ」を表象させているのに対し，ポリーヌを「生きる歓び」として対峙させている。

ポリーヌという登場人物の生きる舞台背景を「海」にしたことは，ポリーヌの存在が海の属性であるサイクル性と照応しているのではないかと推測できる。

第２章で論じた海のサイクル性が，嵐と凪，上げ潮と引き潮などの，永続的繰り返しであったように，ポリーヌもまた時と共に紆余曲折を経て苦しむが，ラザールとは異なり，苦難のときにも，粉砕されることなく，常に自らを立て直し，また平静な自分に戻り，サイクル性のある精神的バランスの取れた人物として描かれている。また多様な試みをしては失敗を繰り返すラザールに対しても，優しく，幸福にしてあげたいという気持ちが強く，立ち直らせる力，サイクル性を持っていると考える。第２準備草稿には，ポリーヌについてゾラは次のように書いている。

> 生きる歓びに満ちていて，あらゆる災難にもめげず，その度に自分を立て直し，また他の人たちを（多少とも）立ち直らせる彼女を示さねばならない。彼女はお金をむしり取られ，心を引き裂かれるが，嘆くこともせず，危機の後いつも陽気に生き，すべての危機から立ち上がる[36]。

ポリーヌは，ラザールとの関係で大きな苦しみを経験する。ラザールは思いつきの計画を実行し，失敗してしまうため，ポリーヌの財産はむしり取られていき，結婚の約束も果たされず，ルイズに心を奪われたラザールに無残に裏切られ，悲しみの極みを経験するが，日常の繰り返しであるサイクル性で立ち直るのである。

---

[36] NAF.10311, fo147/4, cf. Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, Champion, t.4, p.952.

> あたかもこの時計の動きに心を合わせたかのように，ポリーヌは再びとても落ち着きを取り戻した。彼女の苦しみは規則正しい日々によって鎮められいつも同じように繰り返される日常の仕事の中で引きずり回され，鈍化していった[37]。

ラザールをルイズに譲り，二人を結婚させるという結論をだし，自分は出発する決心であった。深く傷つき，自己犠牲にも限界があり，自分の凶暴さが戻ってきて死に至るような気がしたからである。しかしながら「いつもと同じ繰り返される」生活の中で，ポリーヌはまた再生していくのである。

ポリーヌの身体的，物質的サイクル性として，それまでタブーとして取り上げられなかった，初潮や経血をゾラが描写しているのも，ポリーヌの精神的な再生力（＝サイクル性）の身体的生理的表現と考えられるのではないだろうか。十二歳で聖体拝受をした思春期のポリーヌが自然の律動を身体に感じ，自然の所謂サイクル性に目覚める場面が，ポリーヌの初潮のシーンである。

> ある朝シャントー夫人が自分の部屋から出た時，ポリーヌの部屋で嘆く声が聞こえたので，とても心配になって上がっていった。ポリーヌはベッドの真ん中に座り，毛布をはねのけ，恐怖で蒼白になり，ずっと叫びながら伯母を呼び続けていた。そして彼女は血にまみれた裸体のまま身を離し，ひどく驚き，そのショックでいつもの勇敢さをまったくなくし，自分から出てきたものを見つめていた[38]。

思春期の初潮では，昔教師であったシャントー夫人が古びた教育で，不安に苦しむポリーヌを無知のまま放置しようとする。しかしポリーヌは，自らロングの『生理学概論』や，ヤクリュヴェイリエの『解剖学図説』などを熟読し，知識を得て身体のサイクル性を理解し，立ち直って，恐怖をのり越え，反対に

[37] *JV,* p.179.
[38] *JV,* p.51.

身体の成熟を喜び，生きる力に変えるのである。

> 精気でふくらんでいく肉体の不快さ，さらに鈍重になっていく声についての不安な思い，褐色のサテンのような肌の上で次第に濃くなっていく繊細なうぶ毛といった娘盛りの混乱は消えていた。反対にこの頃になって，彼女は娘盛りの歓び，太陽を浴びて成長し，成熟するという圧倒的な感覚を覚えた。高まり，赤い雨として弾けていく血は彼女を誇らしくさせた。（中略）それは甘受された生命，嫌悪も恐れもなく，その機能の中で愛された生命であり，健康の凱歌によってたたえられたものだった[39]。

ミシェル・セールが「循環の特異な例」である女性について述べるように「月経の機能が，暴力，傷，死という昔ながらの表象の持つ原始的な悲壮感をもちながらも，物語の中で主題になり，賛美され，神話から解放される[40]」のである。

またダヴィッド・バグリーは精神的肉体的サイクル性について，「ポリーヌは創造の生きるサイクルに参加し，肉体的生活を再評価する」と述べ「この小さな生の潮汐のささいな流動性は，ラザールとは相反して，変転と共に有益な共同作業をすることへとポリーヌを仕向ける[41]」と述べている。

血の潮である経血は，潮のサイクル性と連動する出産にも結び付く。ポリーヌは小説の終りまで，処女のままであるが，ルイズの出産に立ち会い，ラザールの子供が生まれるのを手助けし，誕生の後，呼吸しないままで，見放された子供に息を与え続け，蘇生させる。ポリーヌの息の律動が子供に生のサイクル性を呼び起こすのだ。ゾラはそのサイクル性を意識しながら，子供の名もポリーヌの一部であるポールと名づけている。

海と共に生きるポリーヌは，その一日，一年の時間性の中で，日々繰り返さ

[39] *JV,* p.54.

[40] Michel Serres, *Feux et signaux de brume*, *Zola*, Grasset, 1975, p.256.

[41] David Baguley.«*De la mer ténébreuse à l'eau maternelle : le décor symbolique de La Joie de vivre*», *Travaux de Linguistique et de Littérature*,1974.

れるサイクル性の人間の営みに歓びを感じている。ラザールの母親がなくなり，落ち込む家に，太陽の光をあて，暖めようとする。

> 彼女は周りで，自分の家が幸福になるように専念し，工夫をこらした。それまでこれほど上機嫌で心優しい健気な態度を示したことはなかった。毎朝起きると笑みを浮かべ，他の者たちの気持ちがさらに落ち込まないように自分の心痛を隠そうと努めた。生きることの楽しさによって様々な災厄を乗り越え，悪意をくじく平等感を身につけた。今や彼女は若木のように，強く元気でたくましく，彼女が周りに放つ喜びはまさにその健康の輝きだった。日常生活の繰り返しが彼女を魅了し，毎日のことをまた繰り返すことに歓びを覚え，もはやそれ以上は期待しなくなり，冷静に明日を待った[42]。

ポリーヌは「日常生活の繰り返し」に満足を覚え，サイクル性である「繰り返すこと」に歓びを見出そうとする。

善を体現するポリーヌは土曜日ごとに漁民の貧しい子供へ施しを続けたり，またシャントー夫人と同じように，親しい医者や司祭を毎週招いて，痛風で動けなくなっていくシャントー氏のために会食を開いた。日常生活の中で，他者との気持ちのやり取りを大事にし，生きる歓びを作ろうとする。ポリーヌの姿勢は母性的な愛に満ちている。

おわりに

第３章では，エミエットマン［崩壊］に進むラザールと，常に立ち上がり，また他人も立ち上がらせる力を持ったポリーヌの再生力としてのサイクル性を見てきた。

海を舞台にし，展開したボンヌヴィルの物語は，ラザールとポリーヌという，

---

[42] *JV*, p.146.

二人の主人公を軸に，違う方向性を持つ二人の生き方を海の二つの作用，エミットマンとサイクル性という切り口から見てきた。

ラザールは近代社会における新しい生き方を表象している。自由な発想や，近代技術で，自己の欲望のままに，多様な分野で熱心に取り組むのだが，結局，彼自身の成功までには至らない。素晴らしい自己の未来という夢想を持ち，興奮を掻き立てられながら挑戦するラザールであるが敗北を見ることになる。そのたびに虚無感に陥り，生きる意志が粉砕され，病的症状をもたらしていく。まさに現代にも通じる，病のはしりを思わせるのである。

一方のポリーヌの方は，自然のリズムに同調しているかのようなバランス感覚で，揺れながらも生き続け，致命的ともいえる苦しみの変遷にも立ち直るサイクル性があるのを見てきた。ルイズの生んだラザールの子供をあやし，痛風のシャントー氏をいたわりながら終わる小説最後の場面は，生の歓びと共に，自分の生き方の勝利に満足するポリーヌの象徴的シーンといえる。

ゾラはこの二人の生き方を，自己の二側面ととらえ，書くことによる自己分析が，自らの心気症という精神的病を治癒させたと，推測することができるのではないだろうか。あるいは治癒したからこそ書けたともいえるだろう。

参考文献

- Emile Zola, *La Joie de vivre*, *OEuvres Complètes*, Nouveau Monde, t.12,2005.
- Emile Zola, *Au bonheur des Dames*, *OEuvres Complètes*, Nouveau Monde, t.11, 2005.
- Emile Zola, , *La Curée*, *OEuvres Complètes*, Nouveau Monde, t.5, 2005.
- Colette Becker, *La Fabrique des Rougon-Macquart*, Champion, t.4, 2009.
- Emile Zola, *Les Rougon-Macquart*, Fasquelle et Gallimard, t.3, 1964.
- Emile Zola, *La Joie de vivre*, Bouquins, édition Robert Laffont, t.3, 2002.
- Emile Zola, *La Joie de vivre*, Gallimard, 1985.
- Henri Mitterand, *Zola, l'histoire et la fiction*, Presses Universitaires de France,1990.
- Colette Becker, *Zola, Le saut dans les étoiles*, Presses de la Sorbonne Nouvelle, 2002.
- Michel Serres, *Feux et signaux de brume*, *Zola*, Grasset,1975.
- David Baguley.«*De la mer ténébreuse à l'eau maternelle* : *le décor symbolique de La Joie de vivre*», *Travaux de Linguistique et de Littérature*, n.2, 1974.
- Auguste Dezaley, *Lectures de Zola*, Armand Colin,1973.
- Alain Pagés, *Guide Emile Zola*, ellipses, 2002.
- 寺嶋美雪，「豊穣と永遠」，『仏語仏文研究』，東京大学仏語仏文学研究会，第 41 号，pp.17 - 40,2010.
- Kajsa Andersson, ≪ *La Joie de vivre* : *du document au récit* ≫ , *Zola à l'oeuvre*, Presses Universitaires de Strasbourg, 2003.
- エミール・ゾラ『生きる歓び』，≪ルーゴン＝マッカール叢書≫第 12 巻，小田光雄訳，論創社，2006.